**言語と身体の｢詩的｣表出について**

**―民族詩学的アプローチの可能性―**

**片岡邦好（愛知大学）**

【概要】

本講演では，伝達意図が増幅された言語行動に共起する，「詩的特性」の発現を検証する．ここで述べる詩的特性とは，「言語メッセージの形式（配列）そのものの前景化」のことであり，意味よりもコードそのものへの注意を最大限に喚起するという機能を持つ（Jakobson 1960）．この理念を受け継いだHymes（1996）の民族詩学的なStanza/Verse分析，さらにMcNeill （1992）のジェスチャー分析を援用し，言語と身体所作の統合的な詩的パフォーマンスを考察する．その分析から，詩的表出を通じて共有・伝授される暗黙知は，社会文化的な「ハビトゥス（Bourdieu 1990）」の一端を担うことを述べる．

ここで詩的言語／行為の発露として着目するのは，言語と身体所作の「反復」と「並行性」が織りなす体系であり、これらは言語使用を「詩的」たらしめる要因としてその重要性が広く認知されている（Jakobson 1960; Friedrich 2001）．近年では，韻文のみならず散文や日常会話においても顕著な特徴であることが指摘され（Tannen 1989; Schegloff 1997），情報管理，伝達意図の確認や明示，理解達成といったミクロなレベルから，言語習得，言語の社会化，文化伝承の推進といったマクロなレベルの機能を持つ点で，コミュニケーションの根幹に関わる特徴であると考えられている．今回特に注目するのは，「自発的ジェスチャー」（spontaneous gesture：喜多 2002）と呼ばれる，発話に伴って出現するジェスチャー（視線配布を含む）である．それらが形態的／スキーマ的平行性と等価性によって「キャッチメント」（McNeill 2000）として作用し，Hymesの述べる中間的なレベル（Verse/Stanza単位）で文化固有の指向／嗜好性に収斂することを指摘する。

具体的には，（1）創作メッセージ（テレビCMにおける発声と身体のパフォーマンス），（2）教育・指導場面（救命講習会におけるインストラクターの解説），（3）語りの共創（東日本大地震のナラティブにおける聞き手行動）に見られる言語／身体使用に着目する．そして（1）における一方向的な伝達から（3）における双方向的な共感の達成に至るまで，奇数単位に依拠する詩的構造が共有され，ある種の沈潜するスキーマが「詩的発現」（Friedrich 2001）を通じて浮かび上がることを確認する．以上により，各文化・コミュニティにおいて指向／嗜好される情報や意図の埋め込み，提示，解釈の様式は文化相対的でありながら，「反復」や「平行性」という特性で抽象化された中間層において，その発現形式は汎文化的な類型に依拠することを述べる．

参考文献（抜粋）

Bourdieu, P. 1990. *The Logic of Practice*. R. Nice (tr.). Palo Alto, CA: Stanford University Press.

Friedrich, P. 2001. Lyric epiphany. *Language in Society* 30 (2), 217–247.

Hymes, D. 1996. *Ethnography, Linguistics, Narrative Inequality*. Bristol, PA: Taylor and Francis Inc.

Jakobson, R. 1960. Linguistics and poetics. In T. Sebeok (ed.), *Style in Language*, 350–377. Cambridge, MA: MIT Press.

Kataoka, K. 2012. Toward multimodal ethnopoetics. *Applied Linguistics* *Review* 3(1), 101-130.

McNeill, D. 1992. *Hand and mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Schegloff, E. 1997. Practices and actions: Boundary cases of other-initiated repair. *Discourse Processes* 23(3), 499–547.

源了圓（編）1992.『型と日本文化』東京：創文社.